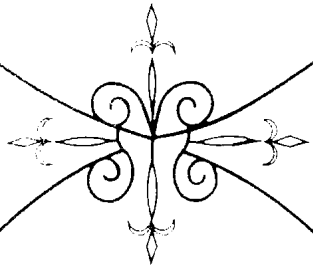
三島由紀夫
全集

23

三島由紀夫全集



23

戯曲 Ⅳ

監修／石川淳 川端康成 中村光夫 武田泰淳
編纂／佐伯彰一 ドナルド・キーン 村松剛 田中美代子

新潮社

一九六二年四月二十五日　第一版発行

久保　栄全集　第八巻　定価一、四〇〇円

©久保マサ　一九六二年

検印廃止

発行者　田畑弘

発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話　東京(291)九五八一—五番
振替　東京八四一六〇番

印刷所　暁印刷株式会社
製本所　橋本製本所

乱丁・落丁本はおとりかえいたします

三島由紀夫全集　第二十三巻　目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

源氏供養……七
喜びの琴……二三
美濃子……一一七
戀の帆影……一六七
サド侯爵夫人……二五三
憂國……三四三
アラビアン・ナイト……三七五
朱雀家の滅亡……四四五
ミランダ……五一七
わが友ヒットラー……五三三
解題……六〇九
校訂……六一四

三島由紀夫全集　第二十三巻　戯曲（4）

源氏供養　一幕

——近代能樂集ノ內——

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

（海を見渡す崖上の文學碑が松林の中にある。晩春の午後。二人の文學青年が手には小説本を携へ、汗を拭き〳〵上つて來る。）

青年A　やつと着いたか。……ふうん、これが野添紫女史の記念碑か。何て不便なところにおつ立てたもんだらう。

青年B　そりやあ仕方がないよ。だつて「春の潮」の主人公の光が、最後に身を投げる場所がこなんだもの。今ぢや誰一人、光の實在を疑ふ奴はゐやしない。

青年A　（携へし小説本をめくりつつ）こんなによく讀まれた小説はないな。文庫本まで入れると總發行部數が二百五十萬部だといふんだらう。

青年B　それを又借りて讀んだ奴がゐるからな。

青年A　さうしてすごい財産を作つたところで、作者の野添紫は、子宮癌で死んぢまつた。二十五六で未亡人になつて、それから小説を書きはじめて、男の噂一つ立てないで、しかもなかな

かの美人で、……

青年B　それが又みんな人氣のもとになつたのさ。

青年A　それにしちやあ、この碑はあんまり人氣がないな。俺たちのほかに誰もゐないぢやないか。この坂の下で觀光バスがとまるつて話だが……

青年B　ばかだな。觀光バスは午後三時でおしまひだから、俺たちは驛から歩いて來たんぢやないか。俺たちほどの物好きはめづらしいだけの話さ。そら、見ろ、このあたりの紙屑や、辨當殼や、ほら、女持ちのハンケチまで、……

青年A　（ハンケチを見下ろして）へ、新品ぢやないか。

青年B　（碑面に顏を寄せ）これ、紫女史の自筆原稿からとつたんだろ。（携へし「春の潮」の最後の頁をめくつて）三百八十二頁、五行目のところだ。「光は瀟洒な繻子の翼を持つた鳥のやうに、春の潮へ向つて身を投げた。」……くちやくちやしたわかりにくい字だよな。

青年A　小說家の字つてみんなそんなだよ。

青年B　しかし、この小說には何だかへんなところがあるな。五十四人の女に次々と愛されて、どうしてそんな色男が、一人で身を投げて死んだりするんだらう。

青年A　つまり一種の神經衰弱だろ。そこが又受けたのさ。「人生と女に倦きた」なんていふのは古い哲學だけど、讀者は又、何かに倦きたといふ話が好きになつたんだ。

青年B　「瀟洒な繻子の翼を持つた鳥」か。……こりやあ光が夏でも冬でも、絹の背廣を着てゐるからだらう。冬でも夏でも絹の背廣か。要するに氣障な男だよな。

青年A　さういふ君はもう光の實在を信じはじめてゐるわけだ。

青年B　（水筒から紅茶をすすめつつ）それがさ、それがこの小説のへんなところなんだ。ふしぎなくらゐの實在感、あんな裝飾だらけの文章のくせに、作中人物はみんな手で觸れれば觸れられるやうな感じがする。思想が肉感を持ち、肉感が思想を持つてゐる。彼女の言葉は、まるで汗をかき血を流す寶石だ。無意識の創作力が現實をどんどん腐蝕してゆくあの硫酸のやうな力。小説自體が、夜のあひだ黑い金巾（カナキン）をかけた鳥籠みたいに、外からは空中にうかんだ鳥籠の優雅な形と、その檻の冷たい骨格と、彫金のふちかざりの輪郭しか見えないのに、中にはたしかに眠つてゐる鳥のけはひ、その夢うつつの時折の羽ばたき、その小さく脈打つてゐる心臟、そのかすかにふるへてゐる强い腿の肉とがありありと感じられる。そんなふうな構造を持つてゐるんだ。

青年A　何だ。そりやあ桑田誠の「野添紫論」の受賣りぢやないか。

青年B　いやな奴だなあ。お前、讀んでたのか。

青年A　（本をめくりつつ）それより、光が身投げをしたコースを辿つてみようよ。（ト上手を指さして）あそこの林のはづれの松から、松のあひだをぐる〳〵廻つて、崖のひときは高い岩の上から身を投げるんだつたな。どうしてあの岩の上に碑を立てなかつたもんだらう。

青年B　危ないからさ。それに何でも、一寸外（ちよつとはづ）して、斜めに構へるといふのが洒落（しやれ）てるんだし、それは又紫女史の趣味でもあつたのさ。

青年A　おや、雷ぢやないか。何だか空もやうが怪しくなつたぞ。早く見物だけでも濟まさなくちや。

青年B　ああ。

（二人、上手へ去る。春雷とどろき、あたり俄かに暗くなる。ト碑のうしろより、スラックスに丸首スウェータアに髪を亂した中年の女現はれ、碑の上にぞんざいに腰かけ、足を組み、いと長き珊瑚のシガレット・ホールダアで煙草を喫み出す。「こつちだよ」「ああ、そつちか」などと叫ぶ青年の聲、上手よりきこゆ。やがて、あたりは明るくなる。日は大分傾いてゐる。あやしき光り漲る。青年二人、上手から立戻つて、女の姿を見ておどろく。）

女　そこのハンケチをひろつてよ。私のだから……

青年A　あなたは？

女　誰でもいいぢやないの。私のハンケチを頂戴。

（青年B、威壓されたる如く、さきほどの女持ちのハンケチをひろつてさし出す。女うけとつて、スラックスのかくしにしまふ。）

青年B　あなたは誰です、一體。野添紫の記念碑に腰かけたりして。

女　誰でもいいと言つたぢやないの。とにかく私はこの石碑に腰かける權利のある女だとだけ言つておくわ。それより御覽なさい。ここから見てごらん。

（ト青年二人を石碑のほとりへ招く。そして二人の肩に手をかけ、肩をめぐらして、上手のはうを見させる。）

青年A・B　あ！

女　あれが誰だかわかつて？

青年A　たしかに光だ。

女　私、ここから見てゐたわ。あんたたちが光の身投げのとほりの道を辿つて、御苦勞様にも、

あの小説のカタストロフの實地檢證をやつてゐたのを。だから私が、本當の光を見せてあげるの、ごらん、夕映えに片面を照らされた松のかげから、おづおづと光が現はれるのを。

青年B　すごい美男子だ。絹の背廣を着てゐる。蒼ざめて、白い額に髪がかかつて。たしかに光だ。

女　たしかに光ですとも。私が言ふんだからまちがひはないわ、他ならない私が。

青年A　五十四人の女たちが愛したあの蒼白い顔、船蟲に蝕まれた美しい古い帆船の船首像みたいなあの顔、あの目を今夕日が射當てた。

女　（旁白）それは私の書いた文章だわ。頭のからつぽな青年たち。

青年B　駈け出したぞ。いくつもの松のまはりをぐるぐると廻つてゐる。きちがひのやうに。

青年A　白いネクタイが海風にはためいて……

青年B　あ、たうとう岩の上に立つたぞ。

（――間。）

青年A・B　あッ！（ト駈け寄らうとするを、女、引止め）

女　もう遲いわ。

青年B　一體あなたは？

女　そんなに責めるやうな目つきで私を見ないで。光はあんな風に身を投げた。「春の潮」に書いてあるとほりだわ。あの小説が命令するとほりに死んだんだわ。あの美しい文章のとほりに……

青年A・B　それぢやあ、あなたは……

女　私の名なんかどうでもいいのよ。それより向うをごらんなさい。何か見えて？

青年A　おや？

青年B　ふしぎだ。今身を投げたばかりの光が、又もとの松の影から……

青年A　さうだ。全くおなじ光だ。

青年B　蒼白い額に髪がほつれて……

青年A　ふしぎだぞ。さつきとまるで同じ様子で、思ひにやつれた顔つきであたりを窺つてゐる。

青年B　寸分かはらない。下草を踏むあの足取も。……おんなじ光だ。まつたくおなじだ。あ、駈け出したぞ。いくつもの松のまはりをぐるぐると廻つてゐる。きちがひのやうに。

（女、石碑から下り、もはや上手のはうを見ない。青年二人は一心に見てゐる。女、煙草を吹かしつつさまよふ。ややあつて）

青年A　あ！

青年B　又やつた！

女　いつまで見てゐたつて同じことよ。私は百萬べんも見た。千萬べんも。……同じことのくりかへしだわ。片面をあかあかと照らされた松の幹、そこからのぞく蒼ざめた美男子の顔、……私は見飽きた。でもあれが盡きないうちは……

（やうやく青年A・Bは女のはうを注視する。）

青年A　あれが盡きないうちはどうなんです。

女　あの男の業の盡きないうちは、私の魂も宙に迷つてゐるわ。あの男の姿は私の姿なんですよ。

青年B　あなたは……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com